

特集 **この国は豊かか?**

5面 **もう一つの対角線を引く**

7面 **私たちの地域・生活をつくり出す**

The Young Women's
Christian Association

YWCA

日本YWCAの使命(ミッション)
イエス・キリストに学び、共に生きる世界を実現する
世界の人々と共に人権・平和・環境の問題に取り組む

第31総会期主題
平和を実現する人々は幸いである—マタイによる福音書5章9節

日本YWCAビジョン2015

- (1) 非核・非暴力により平和を実現する
・平和憲法をまもり、世界に広める
・原発のない社会をつくる
・市民レベルで東北アジアの信頼関係を築く
- (2) 女性と子どもの権利をまもる
- (3) 若い女性のリーダーシップを養成する

2

FEBRUARY
2014

No.718

www.ywca.or.jp



雨宮処凛

Karin Amamiya

profile

愛国パンクバンドポーカーなどを経て、『生き地獄天国』(太田出版、2000年)でデビュー。若者の「生きづらさ」について、また、新自由主義のもと不安定さを強いられる人々「プレカリアート」の問題に取り組む、執筆や運動をしている。著書に『生きさせる! 難民化する若者たち』(太田出版)、『14歳からの原発問題』(河出書房新社)他多数。

3年前の年末だったと思う。ある繁華街の街頭で、ホームレス状態にある人たちへの「年末相談会」が開催されたので、手伝いに行った。新しい年を前にして華

やいだ雰囲気の中の、支援者に案内され、一目で路上生活が長いとわかる人から、絶対に「ホームレス」には見えない若い男性まで、さまざまな人が街頭に立てられた

女性の貧困、 いくつかの 実態

p o v e r t y

テントの相談ブースを訪れた。

20歳くらいの女の子がやってきたのは、もう日も暮れそうな頃だった。彼氏らしき男性に連れられてやってきた彼女を見て、言葉を失った。女の子のお腹は、コートの上からもはつきりとわかるほど大きく張り出していたからだ。支援者たちの間に動揺が走り、そうして彼女が一刻も早く安全であったかい場所に行けるよう、さまざまな人が動き始めた。

真冬の東京で、若い妊婦が路上生活を強いられていたという事実、ただただ言葉を失った。どうい経緯があったのかなど、詳しいことはわからない。しかし、この7年ほど貧困問題を取材する中で、「ホームレス状態の若い女の

子」には何人か出会ってきた。

親から虐待を受け、東京の知人を頼って上京して居候生活を始めるものの、その知人との関係悪化から部屋を出されてしまった女の子。20代の彼女は、極寒の東京で、とにかく「誰にも気づかれぬように」に数ヶ月も野宿生活をしてきた。若い女性が「ホームレス」であると感じられることほど危険なことはないからだ。

また、別の20代の女性は、ある意味で「女性の貧困」の典型と言える経緯を辿っていた。親との折り合いが悪く、10代の頃に実家を勘当され、「寮付き」ということで飛び込んだ風俗の世界。その後恋人ができて同棲を始めるものの、DVが始まってしまった。しかし、

彼女は数年間、彼氏のDVに耐え続けた。なぜなら、彼女には「DVを受け続けるか」「彼氏と別れてまた風俗に戻るか」「彼氏の家を出てホームレスになるか」しか選択肢がなかったからである。

数年後、彼女は恋人と別れて再び風俗の世界に戻る。が、うつ病で働けなくなり、家賃滞納でそのままホームレス状態に。現在は生活保護を受給し、うつ病の治療を続けている。

「女性の貧困」の、これがいくつかの現実だ。もちろん、働く女性の半分以上が非正規雇用だったり、「単身女性の三人に一人が貧困」というデータも重要である。しかし、彼女たちの実態は、おそらくどのデータにも反映されないだろう。そうして実態が見えないままに、女性の貧困を巡る状況は悪化の一途を辿っているように思う。

2013年11月には、この国の「底が抜けた」ような事件が起きた。大阪で、31歳の女性が餓死死体として発見されたのだ。また、

2012年1月には、札幌で40代の姉妹が遺体で発見されている。姉の死因は病死、妹は餓死・凍死と言われている。

これまで、「孤独死」「孤立死」が心配されるのは、主に高齢の男性だった。なかなかSOSを発信できない男性と違い、女性の場合は「助けを求める」ことに抵抗が少ないので男性よりは孤独死リスクが少ない——そんなイメージを多くの人が持っていたはずだ。

しかし、SOSを発信しても、時にそれは無視されてしまう。大阪の女性は、母とともに亡くなる4年前、生活保護相談をしていた。札幌の姉妹も、亡くなる前、3度も役所に生活保護の相談に訪れていた。しかし、彼女たちの声が届くことはなかった。

はからずも、今国会で「生活保護」制度が改悪されてしまった。窓口で相談者を追い返すような「水際作戦」にお墨付きを与え、また「何がなんでも家族で助け合え」というような「扶養義務」の強化が盛り込まれた改悪案が成立

してしまったのだ。

これによって、生活保護はますます受けづらくなる可能性がある。それだけでなく、2013年夏からは、生活保護基準の引き下げが始まっている。安倍政権が真っ先に手をつけたのが、こうした「弱者切り捨て」政策だったことは、長く記憶しておくべきだろう。

最後に、貧困問題にかかわって、痛感することがある。それは「当事者がSOSを発信してくれること」は、奇跡のような出来事だということだ。

なぜなら、人は「自分は生きていいのだ」という自己肯定感がないと、決して「助け」を求めることはできない。また、「社会や他人に対する最低限の信頼」も同時に持っていないと、誰かに「助けて」なんて言えない。さまざまなか条件が重なってやっと発される「SOS」。それを踏みにじるような政治に、全身で抗いたいと思っている。

(2013年12月記)



あいまいな喪失 「失ったもの」と「失っていないもの」

前田 圭子

「雪が降ると放射線量が下がるのよね」「雪に遮られるからね」「でも春になると山から雪解け水が流れて来て、それでまた線量が高くなるから心配」

放射能の話は、日常的にはもう会話に出てこない。街を歩いていても、小型ロボットのような線量計以外に、放射能被害を可視化するものはない。一見、普通の生活に戻ったように見える。しかし実際、放射能の話は、語れる場ではとどまらず溢れる。放射能被害の話に依頼すると、彼女たちは心を削って語る。不安が、苛立たしさが、悔しさが涙となってこぼれ出る。「泣かないで話そうと思っても、どうしても涙が出てきちゃって」と苦笑いする。

生命の源である空気が、水が、食べ物信じられない。どこが安全でどこが危険なのかも明確にはわからない。除染の意味があるのかないのか。大量に出た汚染土の処理はどうなるのか。将来の家族の健康は大丈夫なのか。何もかもが霧の中なのだ。米国ミネソタ大学のポーリン・ボス博士は、はっきりしないまま残り、解決することも、決着を見ることも不可能な喪失体験を『あいまいな喪失』(ambiguous loss)と定義した。

避難していた人たちが元の地に帰ってきている。誰も本当に安全だとは信じていない。多くを失ったが、まだ失っていないものを大切にしたいから帰ってきているのだと、私は思っている。それは家族、学校、友人、地域、仕事など人によってさまざまだ。失っていないものを再確認することによって、新しい明日を生き抜く力を身につけようとしているのだと思う。

私はこれからも、その声を聴きたい。刻々と変化する状況に身を置き、ともに明日を考えたい。

(広島YWCA会員)



この国は豊かか？

加盟YWCAの活動現場から

女性と貧困

ウイメンズカウンセリング
名古屋YWCA
西山節子

女性の相談に関わる時、大きな障害として見えてくるのが女性の貧困問題であり、もっとも顕著に現れるのがDV家庭である。

一般的に家庭の経済力獲得活動を担うのは夫が多く、支える妻の働き（家事・育児・介護）は金銭

に結びつかない。しかも、DV夫

は家計管理に細かい人が多く、家庭内貧困生活を強いられる女性は多い。離婚してシングルマザーになる人も多いが、生活保護費受給

の壁は厚く、複数の仕事をしていてもシングルマザーの48%が年間可処分所得112万円以下となり、DV夫と一緒に生活よりさらに厳しい

貧困生活を強いられることが多い。親の年金も頼れず、母子が命の綱と頼みにする養育費も、元夫

の突然の離職や行方不明で途絶えることも多い。（離婚母子家庭の

養育費受給は20%程度と言われている）

暴力のない生活を望んだ子どもも、希望校への進学が経済面から叶わなくなるなど、自分の将来が不透明になることで、母子間に亀裂が生じることも散見される。しかも、そのような状況にあるシングルマザーがリストラされることも多く、性的産業に組み込まれる

例もある。

このような経済的困窮生活を予測し、多くの被害女性はDVの中に留まる道を選択する。

女性が社会から求められるケア役割に沿った生き方をした場合、経済的に自立した生き方は困難となり、貧困になる要素を抱えている。国の施策を変える努力と共に、女性自身がひとりの人間として生きる生き方を幼少期から考えられる環境づくりが急務である。

炊き出しに参加して

フェリス女学院中高YWCA会員

毎週金曜日、横浜市の寿公園では、「ことぶき炊き出しの会」によって炊き出しが行われる。

石川町駅は元町や中華街など、横浜を代表する観光スポットの玄関口として知られている。しかしその石川町から十分も歩けば、「日

雇い労働者の町」が広がる。観光

地の華やかな雰囲気はみじんも感じられず、閑散とした灰色の空気が漂っていた。日常とは異質な雰囲気に、軽い衝撃を受けたことを今でも鮮明に覚えている。

厳しい寒さの中、手早く屋外で調理の下準備が始まった。メニューは雑炊である。私は人参の皮をむくことになった。渡された野菜は青い「バケツ」に入っており、そこにむいた野菜を戻す。最初は

違和感を拭えなかったが、作業を繰り返すうちに、むしろこれだけの量の食材を必要とするほど大勢の方が、この炊き出しの配給を食べに来るのだ、という実感が強くなり、夢中で皮をむいた。

配食が始まった。見ると、公園を囲むように長蛇の列ができていた。ひととおり配食を終えるほどいぶ混雑も解消され、私たちも遅い昼食として雑炊を食べるように言われた。列に並んで待っている

と、後ろの男性が「おまえら何で並んでるんだよ」と呟くのが聞こえた。私は胃が縮こまる思いがして、結局食事を受け取ることができなかつた。

多くの方が感謝の言葉とともに受け取ってくれたが、この男性の言葉に寿の厳しい現実を垣間見た気がした。貴重な体験だった。

「お金=豊かさ」 ではない暮らし

わが家の
収穫物



りにのびのびと育ってくれたと思っている。

フィジーの村で強く打たれたもう一つは、人のために惜しげなく時間を
使う姿だ。日本人なら、遠慮
して人に頼まずお金でサービス
を買うような場面でも、平気
で頼んだり頼まれたり。すぐ
に時給に換算してしまう自分
のはしたなさを恥じた。「半農
半X」で自分の時間を自分の裁
量で生きられるようになったら、
人のために時間を使える人になり
たい、そこそが真の豊かさでは？と
憧れた。この部分の達成率は「ぼちぼちで
んな」というところか。

時給に換算しないという点では、自然の
素材でひと手間かける食生活もそうだ。世
界遺産の「和食」を料亭でいただくには手
間暇に見合う料金を支払うが、わが家では
お金をかけずにひと手間かける。決して流
通することのない間引き菜や花芽など、手
間がかかるが料理するとほんのちよつぱり
になってしまうものの深い味。現代日本の
常識では「非効率」の極みだが、「よそで
は食べられないぜいたくな料理」と、超素
朴な料理をもったいぶって供している。

所得の高い人から1列に並べ、真ん中の
人の所得の半分以下だと貧困という「相対
的貧困率」の基準で言うと、わが家はバリ
バリの貧困家庭である。現金収入だけで「貧
困」を測る貧困な発想で、困窮度は測れな
い。現金がないと即困窮する都会とちがっ

て、田舎ではとりあえず食べて行くことは
できる。放棄田も空き家もたくさんある。
近所の人から野菜だってもらえる。本当に
困っている人は田舎に来れば…と単純な発
想で思ってしまう。

少ない収入で暮らすには、もちろん制約
も多い。食費の少なさはその真骨頂だが、
食い意地の張っている私など、もしも金持
ちなら霜降り和牛やイクラや高級デザート
を食べすぎて病気になるだろう、貧乏でよ
かったと心からそう思う。外食はほとんど
しない、着るものはまずはリサイクルショ
ップで物色、本は図書館を最大活用、旅館

に泊まる旅行なんて考えられない。田舎で
は大人1人1台の自家用車+軽トラが標準
だが、わが家は軽自動車1台でやりくり。
娘たちには「大学行くなら国公立、奨学金
を自分で返す覚悟で」と言い渡し、電化製
品も10年前と同じラインアップ。これをみ
じめと感じるか、それでも楽しそうと思っ
るか、そこは個人の価値観だろう。丁寧暮
らすことで環境負荷を最小限にし、身の回
りの資源を循環させている点で、地球と大
気に少しは貢献している自負はある。

田舎で暮らす人も、大半は現金経済に絡
めとられ、子どもたちはチンした冷凍おか
ずの弁当に慣れ、外で遊ぶより
ゲーム機に熱中している。私た
ちは全く少数派の変わり者だ。

集落の一番奥なので、車はほ
んど通らず、夜はどんなに静
かか…と思うと大間違い。年中
聞こえるシカの声に加え、夏は
何種類ものカエルの大合唱にフ
クロウの囁き、秋は虫の大合唱
にクマの遠吠え。田舎の夜は賑
やかで、月星は眩しい。都会で
不健康にあくせく働く人の納税
に支えてもらっているという自己
矛盾は自覚している。だから「確
信犯の貧乏人です」なんて肩肘
張らず、私は私らしく、この地
に根を降ろして自然体で生きて
行きたい。



わが家から見える里山風景

大阪YWCA会員 雀部真理

12年前、「土があれば飢えることはある
まい」と、収入の目途なく移住し、有機・
無農薬野菜と卵はほぼ自給しながら暮らし
ている。「半農半X」(農が半分、その
他の活動が半分)を志しつつ、徐々にX部
分が肥大・増殖し、畑にかける時間が浸食
されている現状。Xのうち、収入を伴う仕
事と、伴わない地域活動がほぼ半々である。
1990年代に南太平洋・フィジーで3
年強を過ごした。人口の8割が暮らす村落
部で、モノが少なく日本人の目には「不便」
な暮らしの中、子どもたちがキラキラ生き
生き、知恵に満ちている姿に魅了され、そ
れが田舎暮らしに踏み切る推進力に。3歳
と6歳で移住した娘たちは、フィジーの「知
恵ガキ」には遠く及ばないものの、それな



デボラ会長(左)、キャロライン会計役員と

2013年10月、タイで開催する世界YWCA運営委員会の前に、世界YWCAのデボラ・トーマス・オースティン会長とキャロライン・フラワーズ会計役員が、突然東京を訪ねてくださった。滅多にないこのような機会をとらえ、私たちは関東近隣のYWCAによる活動報告だけでなく、福島YWCA・沖縄YWCAを交えて、それぞれの現状を伝える機会を持った。世界YWCAのお二人は日本の状況をよく理解し、世界YWCAの運動に反映できるよう、しかるべき決議案を2015年の世界YWCA総会で出すことや、海外のYWCA有志で沖縄を訪ねる旅を世界YWCA総会の前後にする可能性など、

もう一つの対角線を引く

世界の友と共に

運動の広がりや示唆を与えてくださった。この訪問と顔の見える関係は、私たちに力を与えてくださった。これに先立つ2011年には、ニヤラサイ・ゲンボンズバンタ世界YWCA総幹事が、長崎での全国会員集会のために来日してくださった。世界の友は、日本の声に耳を傾けてくださった。「私たちは世界をあげて、女性に対する暴力の問題に取り組んでいる。沖縄に基地を押し付けている状態は、そこにいる女性たちへの暴力の問題として、世界共通の課題として取り上げられることもできる」とコメントしてくださった世界YWCAのリーダーたちの言葉に励まされる。

日本の社会は今、どこへ向かっているのか。私たちの心に憤りが宿ることがあ

る。しかし、この1月には沖縄で、日韓YWCAシニア・カンファレンスが開催された。また、尖閣諸島(釣魚島)をめぐる問題で、中国との民間交流がたびたび中断される中、昨年は日中のYWCAで「南京を考える旅」を実施することができた。台湾YWCAとも親しい関係を築いている。また、フィリピンYWCAの台風被災者支援の募金呼びかけに、日本の皆様から寄せられた寄付金を送ったところ、フィリピンYWCAは報告書に、日本からの支援を挙げて感謝してくださった。また、私たちは国連女性の地位委員会(CSW)へもNGOとして参加するようになり、政策に女性の声を反映する機会を掴み始めている。

こうして世界に連なる私たちNGOの役割は、硬直した国家間の対立を超えて、もう一つの対角線を引くことにある。「平和を実現する人々は幸いである」(マタイによる福音書5章9節)、日本



短い滞在時間の中で、在日米軍基地訪問をしてくださった

YWCAが掲げるこの主題のように、私たちは、小さな歩みであっても、いさかいの火種を消す使命を持っている。

海外でのつながりのみならず、国内での世界とのつながりも忘れてはならない。ナショナルリズムが声高になるとき、同時に日本に住んでおられる外国籍の方々が生きづらくなる。多国籍の仲間と、私たちYWCAはこれまででも、これからも全国各地で活動していく。それは単なる協働ではなく、大きな使命の中の大切な歩みであることを改めて感じる。世界に連なるYWCAだからこそできること。さらに力強く、なすべき歩みを進めていきたいと思う。

日本YWCA会長 俣野尚子

「戦争のどきる国へ」に抗議

国会閉会中の閣議決定を含め、十分な審議と国民への説明責任を果たさないうまま、「国家安全保障会議の創設関連法」成立、「特定秘密保護法案」の強行採決、武器輸出三原則を破る「国家安全保障戦略」の決定、首相の靖国神社参拝、沖縄県知事へ迫る「辺野古への新基地建設の承認」等、憲法9条を形骸化し、強行に「戦争のどきる国づくり」を推し進める動きが加速しています。日本YWCAは安倍政権に対し、2013年12月、3本の抗議・要請文を出しました。

文書はこちらから <http://www.ywca.or.jp/aboutus/request.html>

平和な世界を実現するために、 私たちがしなければならないこと 人材養成部会の使命

公益財団法人日本YWCA人材養成部会は、広く一般女性を対象とした、平和を実現するリーダーとなる人材育成事業を企画・実施するために、今年度から新設された部会です。

スタートの今年度は、「キャパシティビルディング（人・組織・社会全体の能力を引きだし、向上・維持するアプローチ）」をテーマに、3回連続講座を次のタイトルで実施いたしました。①夢をかなえるために、今すべきことを知ろう！②企画力をたかめよう！③ボランティア募集と資金調達のためのツボを学ぼう！

これから起業や地域活動を始めようとしている意欲的な参加者に、全国の地域YWCAの会員やスタッフも加わり、実りの多い講座となりました。平和な社会を実現するという目標を達成するためには、「思い」だけではなく「組織力」が大切だということ、講座を通じて改めて感じます。さらに、今年度最後の講座として、

組織をつなぐ関係づくりを学ぶ、「職場で使える・生活に生かせる、女性のためのコミュニケーション講座」を1

月13日に実施しました。組織は、一人ひとりが、しっかりと繋がってこそ適切に動いていくもの。そのためには、自己と他者の尊重のバランスと、上手な自己主張も必要なスキルになることを学ぶ機会となりました。

賛助員の集いを開催しました

500名を越える賛助員の皆様、日本YWCAの活動を支えてくださっています。日頃の感謝と、賛助員相互の交流の機会に、賛助員の集いを2013年11月22日（金）に東京で開催しました。2014年も秋に開催予定です。全国の賛助員の皆様、いつもありがとうございます。



「賛助」でYWCAに参加しませんか？

賛助会費：年間一口

3,000円・5,000円・10,000円

郵便振替：00170-7-23723

公益財団法人日本YWCA

通信欄に「賛助」と明記ください。

機関紙「YWCA」（年6回）、日本YWCA活動報告をお届けします。

※当法人へのご寄付は税額控除の対象になります。

来年度も、自分の思いを抑制することなく、柔軟に思考して整理し、

ポジティブに発言し行動できるリーダーを養成することを目標に、日本YWCAならではのプログラムを提供していきます。皆様のご参加をお待ちしています。

日本YWCA人材養成部会長

藤谷佐斗子



（種）

彼らは剣を打ち直して鋤とし
槍を打ち直して鎌とする。
国は国に向かって剣を上げず
もはや戦うことを学ばない。

（イザヤ書2章4節）

平和のために活動する人たちが好んで用いる聖書の言葉です。国連本部前にも、この言葉が刻まれたモニュメントがあるそうです。2013年末に終わったNHKの大河ドラマで、同志社の卒業式の場面に用いられ、話題になりました。日清戦争の開戦の迫る時代、社会に出ようとする若者に、明治維新の内戦を体験した学長が贈った言葉でした。

一方で、聖書には全く逆の「鋤を剣に、鎌を槍に打ち直せ」（ヨエル書）という言葉もあるのです。一説によると、こちらがもともとの言葉だったそうです。イザヤ書は、あえて逆にしたと言っています。それは長い戦乱の末、国を失うという厳しい時代を背景として書かれた言葉だったのです。

かつての日本も、まさに「鋤を剣に、鎌を槍に」して戦いに臨みました。その時代、また敗戦後の厳しい時代を生きた人たちは、二度と同じ過ちをしないと決意したはずですが。その思いは、平和憲法に託されたのではないのでしょうか。「国は国に向かって剣を上げず」そんな日本であり続けることを祈るばかりです。

田中真希子

日本基督教団真駒内教会牧師

私たちの地域・生活を つくりだす

毎日ユリシーズ

子どもの時、ギリシャ神話に登場する、英雄オデュッセウス（ユリシーズ）の冒険にあこがれた。しかし、その冒険が大人になって実現するとは思わなかった。

7ヶ月間の育児休業も終わり、昨年4月に職場に復帰した。今年の11月までは妻が時間短縮勤務中であつたので、毎日の送り迎え、夕飯の支度は妻に頼っていた。しかし、妻の時間短縮勤務が終了すると、事態は一変した。

今はトロイの木馬で有名な、英雄オデュッセウス並みの狡知と決断力と

運を毎日試されている。

子どもを保育園まで送り、職場に定時に出勤し、同僚に弁明しつつ仕事を切り上げ、子どもを迎えに行き、帰宅し、夕飯の支度、子どもをお風呂に入れ、夕飯を食べさせ、洗濯機を回し、子どもと遊び、寝かしつけ、洗濯物を干し、食器を洗い、次の日のお支度をし、気づいたら眠って朝になっている。毎日が冒険である。スリル満点である。無事定時に出勤できただけで、その日の僥倖きやうこうを感謝する毎日である。子どもの世話と、家事と、明日に向けての諸々の仕事や家事の段取りと、思索と感情と、妻や子どもとのやりとりが渾然こんぜん一体となり、同時に進んでいく様は、まるでジェイム

ス・ジョイスの描く『ユリシーズ』の一場面である。

とはいえ、一番大変なのは妻であつた。家事・育児の多くは、時間短縮中の妻に依存していた。でも、妻は一言も冒険を誇らないのである。

なお私は4月から、2年間の育児休業取得予定である。

平塚YWCA会友 鹿島玄明



地域の知恵と力と 共に歩む

呉YWCAは、昨年創立65年を迎えた。伝統ある歩みをふまえ、引き継ぐもの、新しく生み出すものを考えて、活動を展開していかなければならない。しかし実働会員の少ない現状の中、地域の知恵と力と共に歩むことで未来を開きたい、と期待している。



助成金授与式

そこで、65周年記念事業として、「未来をひらくグループ活動助成金」を設け、呉市近郊地域に公募した。

採用の観点は、①呉YWCAの建物を活用すること、②未来につながる企画であること、③呉YWCAの紹介になっていること、④いろいろな人や団体との連携や広がりが見込めること、⑤形に残るものであること、等である。

結果、次の3グループに助成することになった。①マツボックリ姉妹社の「呉YWCA65周年記念小冊子」発行。呉Y's ワンダフルウーマンの紹介や、呉YWCA伝統の肉まん、クリームコロッケのレシピ等、親しみやすい内容に。②学生まちづくりネットワークの「呉YWCA外の坂道のデザイン・改修」。アットホームな木造建築の、呉YWCA会館に誘われるエントランスに。③はなの会の「共に作る生

活を彩る陶芸」。障がいを持つ人と健常の人が、共に作業・展示する中で、相互理解を深める活動に。

呉YWCAの会員が考えつかなかった視点やアイデアで、意欲的に活動されている。この事業をきっかけに、呉YWCAに新しい風が吹き、地域との繋がりが広がっていることを実感している。今後にも期待したい。

呉YWCA会長 長尾真理子



学生まちづくりネットワークの活動

エンパワーするNGO



YWCAの本棚



『(株) 貧困大国アメリカ』

堤 未果 / 著
岩波新書 / 発行
760円+税



「貧困大国アメリカ」シリーズ完結編の本書は、冒頭から驚愕の事実の連続だ。家畜工場の劣悪な環境で、大量の成長促進剤と抗生物質を投与され育つ牛豚鶏。遺伝子組み換え(GM)種子作物の市場支配。欠陥だらけの食品安全基準とGM食品表示義務撤廃。利益追求主義の巨大化した多国籍企業が、アメリカのみならず、すでに世界の多くの国の法律を企業寄りに書き換えさせ、消費者から安全な食の選択の可能性を奪い、健康への悪影響に関する情報を隠蔽している。「食」だけではない。教育、医療、保険、公共サービスについても、「1%」の大企業と投資家の利益のために、「99%」

の人々の生命の安全と尊厳、多様性が切り捨てられる「貧困大国」は、TPPなどの国際条約を通して、米国に追従する日本の、まさに明日の姿となるのではないかと感じる。

しかし著者は、世界的に加速するこのうねりに対峙する市民運動をとりあげ、最後にこう綴る。「この世に生まれ、働き、人とつながり、いのちに感謝し、次の世代にバトンを渡す。そんな、ごく当たり前の生活をする」と決めた「99%」の意思は、欲でつながる「1%」とおなじように国境を越えてつながってゆく。今はないもう一つの選択肢を未来につくっていくために、ぜひ今、手にとっていただきたい一冊だ。

編集部(E.K.)

フィリピン 緊急募金報告

2013年12月31日までに、皆様から956,121円、ご寄付を頂きました。現地で支援活動にあたるフィリピンYWCAを通して、被災された方々の支援に活用します。募金は1月末日まで受付。それ以降のご寄付は、国内外の今後の災害支援に充てさせていただきます。

ご協力ありがとうございました

- 賛助員
谷口道子 松本幸子 高月三世子
甲子敏江 黒木順子 大田八千代
大川孝子 藤原絹代 石井摩耶子
石原清美 荒川知子 五十嵐和子
乾康子 赤木弘子 三股まさ子
寺嶋公子 篠真紀子 三木ケン子
小川郁子 汐崎康子 松原恵美子
小田真弓 渡辺幸子 宇都宮芳子
松本京子 藤沢貴代子 島海百合子
川尻孝子 阿部有三 大里美香子
宮内貞子 秋篠理恵 大西しげ子
秋篠薫子 西田和子 向後理恵

ピースメーカーズファンド
(平和を創り出す女性のリーダーシップ養成のために)

- 小川郁子 黒木順子 石井摩耶子
神山武 菊地康子 酒井真紀子
石田政美 久米武男 金山由香里
和田京子 大矢昭三 大矢日出海
大田敏子 岩田陽子 伊藤真智子
澤田猛 鶴崎祥子 高月三世子
外崎弘子 常葉俊子 仁木三智子
叶崎弘子 鈴木信子 江尻美穂子
一杉静子 長尾明美 三股まさ子
和田美 渡辺幸子 小波津喜美
和一色 梶山順子 大西しげ子
実生律子 渡辺園子 西原美香子
松本京子 須田京子 山田小枝子
金剛静慧 須部道子 難波郁江
丹野信子 阿部祝子 藁谷さた
田中桂子 庄子薫美 八島矩子
米田幸子 堀江友子 野中昭弘
神谷穂子 植村木子 植村妙子
海老名真理子 海老名真理子

- 日本聖公会八王子復活教会
日本キリスト改革派田舎教会
横浜JOYバプテスト教会
日本聖公会清瀬聖母教会
日本聖公会浅草聖ヨハネ教会
日本バプテスト同盟東京平和教会し
らゆりの会
日本バプテスト同盟東京平和教会駒
込チャペル
日本キリスト教会南浦和教会
福島YWCA

- 多文化共生ファンド
(世界で助けを必要としている女性と子どものために)
三股まさ子 大西しげ子
能本YWCA 福島YWCA
(オリーブの木キャベン募金)
黒木順子 寺嶋公子 山本貴美子
岸岡芳美 小松陽子 添野ふみ子
野々村耀 川上静子 江尻美穂子
川尻泰子 桑原貴子 三股まさ子
三川純一 大沢則子 中村美南子
高柳博一 牧野信成 田村三保子
首藤和子 阪本和子 富岡美知子
坂和俊 田中京子 小波津喜美
板橋章一 原美紀 石塚多美子
小泉孝典 小泉美紀 藤田ナツ子

- 白田治子 毛利亮子 松本紗奈
青島修 手島亨景 杉山知子
小村明子 庄子泰子 田中唯彦
木村浩子 河津緑 横田昌三
池田進 池田立子
ウエーラー・ルツ・エステル
宗教法人粕屋バプテスト教会
日本基督教団松沢教会婦人会
東京YWCA自主グループ英語研究会
福島YWCA 長崎YWCA
松山YWCA 平塚YWCA
(パレスチナの女性と子どものための募金)
日本キリスト改革派東京総務教会
(フィリピン台風被害緊急支援募金)
中村紀子 勝美恵 安藤いづみ
西田淳志 西田苗緒 山高万寿子
花輪正士 村井京子 イトウアツシ
清水嶋孝 玉田晋平 一井リツ子
内山佳子 吉田亜希 一井不二夫
春山慶彦 山本佑輔 小田川華子
北門千恵 佐藤寛子 岩井真代子
有馬勇 横田千恵子 横田千恵子
織田雪江 藤原真希 田中美智子
京野洋子 清水智裕 比企敦子
山元圭太 手島千景 浅原由美
依田良子 赤木弘子 森田安洋
清水幸子 大野綾子 大野肇
清水 山本裕子 石渡能子
難波郁江 石井摩耶子
モリジェニファアカスミ
マーサ・メンセデューク
ツチヤミキイケダシユイチ
オチロウ カツクラシユイチ
スギウラフミノリ カツクラミツヨ
能本市キリスト教連合婦人会
有限会社信和ハウス
株式会社サン・ナカタニ
日本キリスト教団大阪東十三教会
同志社大学国際居住研究会
広島YWCA 能本YWCA
呉YWCA 新潟YWCA
平塚YWCA 甲府YWCA
東京YWCA 国領センター
東日本大震災被災者支援募金
石川松子 黒木順子 中野喜重子
乾康子 島田麗子 石井摩耶子
中村秀雄 堀尻和子 渡辺寿美子
島津良子 川尻泰子 佐々木三三子
阿部有三 野呂幸子 三股まさ子
大川孝子 難波郁江
日本基督教団市川三本松教会
Bluebonnet英語教室
日本学園高校宗教委員会クリスマス
レゼント係
広島女学院中高YWCA部
東洋英和女学院同窓会
福島YWCA 新潟YWCA
甲府YWCA 松山YWCA
長崎YWCA 浦和YWCA
呉YWCAを支える会
東京YWCA有志
(2013年10月21日、12月20日現在
敬称略)